



## 農を活用した福祉のまちづくり

愛知県 長久手市長 吉田 一平



私は、常々「これまでの時代は『山を登る時代』で、皆が山の頂上にある目標＝経済発展、人口増加、大量消費社会を目指して歩んできた時代でした。しかし、今、時代は大きく変わり、国の経済は停滞し、人口は自然減へと転じ、超高齢社会が始まっています。これからは『山を降りていく時代』です。頂上を目指す時代から、裾野に向かって360度あらゆる方向へ降りていく時代がやってきたのです。人々はどこへ降りていくのか、どのような目標を定めるべきなのか。誰も経験したことのない時代が始まっているのです。」と口にしてきました。そしてあの東日本大震災。目の前にあるものすべてが一瞬にして失くなるという未曾有の大災害は、自然の摂理の前では、人が築いたものに「絶対」はあり得ないということを確認させる貴重な機会を私たちに与えてくれました。

これから私たちは、どんな目標を創造し、どんな社会をつくれればいいのでしょうか。私はこの40～50年のひとつの時代の仕組みや価値観を、一度見直すことから始めなければならないと考えています。そして、皆が幸せに暮らすために、みんなで一緒になって考え、新しい地域社会のかたちを創りだしていかなければならないと考えています。

私は市長になるにあたり、3つの基本理念をかかげました。

フラッグ1 一人ひとりに役割と居場所があるまち

フラッグ2 助けがなかったら生きていけない人は全力で守る

フラッグ3 ふるさと（生命ある空間）の風景を子どもたちに

この3つのフラッグを市民が幸せに暮らすための新しい答えを創り出すツールにしたいと考えています。そして私はこれらの理念を基に市民と一緒に、新しい地域社会の形＝「日本一の福祉のまち」を実現したいと考えています。

「日本一の福祉のまち」と言っても、単に施設が日本一とか特別のサービスが日本一というものではありません。地域に暮らす人々が温かい思いやりや人としての生きがいを持ち、お互い支え合うことのできる太い「絆」で結ばれた「幸福度の高いまち」。高齢者の独居、徘徊、障がい者の就労、若い世帯の子育ての悩み、子どもたちの心の悩みなどの様々な地域の課題が、新しい人々の繋がりの中で解決していくことのできるまちです。

ではそんな「日本一の福祉のまち」を創るためにはどのようにすればいいのか。私はこの「絆」、繋がりを一人ひとりが実感する仕組みをみんなで共有すればいいと考えます。繋がりを実感する。その手段の一つとして「農」が大変有効であると考えています。

おじいさん、おばあさん、父さん、母さん、若者、子ども、障がい者、健常者、いろいろな人が協働して、畑を耕し、種を播き、苗を植え、世話をし、汗を流し収穫物を得る。そして一緒に食べ、喜ぶ。いろんな人がいろんな形で交流し一緒に活動する場として「農」は「生産」「生きがい」「癒やし」「環境保全」「教育」「レクリエーション」「健康づくり」など様々な機能を持っています。そして、そこでは様々な場面で様々な人の役割と居場所が有り、相互に連携して繋がることのできる。

自然という生命ある空間の中で、あらゆる命が動きながら連動し緩やかに繋がる。命が生まれ命が終わる。助けあい 支えあい 与えられ また還す という知恵と工夫に満ちた生命の循環を感じられる世界。あらゆるものが、一緒にいるために「ゆっくりとしたおおらかな心持ち」が存在する世界。それが「農」にはあると考えます。こういう場でみんなで迷ったり、知恵を出し合ったり、一緒に苦勞して作業をすることで、新しい「コミュニティ」が生まれる。新しいまちの形はこんなところから始まるのではないのでしょうか。

しかしこれらの試みは、まだ始まったばかり、試行錯誤の連続です。だからこそ、私は「何事も、時間をかけてよい、失敗してもよい、遠回りしてもよい、無駄がたくさんあってよい、正解はなくてよい、あったとしてもひとつでなくて良い、いつも迷っていてよい、未完成でよい」と声をかけています。こうした「心持ち」を軸にして、失敗を恐れず、人が幸せに暮らすための新しい社会の仕組み、「日本一福祉のまち」を「農」をキーワードに市民の皆さんと一緒に創り上げていきたいと考えています。